



報徳のおしえ

Q&A

## 報徳のおしえQ & A増刷発刊にあたり

豊頃町小・中学校連携教育推進会議では、町内児童生徒に対する指導の継続性や接続の円滑化を図る学習指導や生徒指導、学校運営などについて望ましい在り方を実践研究し、報徳の町子ども達が目標を持って夢に挑戦する教育推進に資するため、「報徳のおしえ」を基盤とする小・中学校相互の連携教育の推進を目指しています。

また、この取り組みは、学校教育の範疇で完結するものではなく、保護者、各地域住民のご理解はもちろん、町が設置している、生涯学習の町づくり推進本部が推進する「報徳のおしえを基盤とする生涯学習推進」の一環として位置づけすすめられています。

具体的には、町教育研究所の研究活動とも連携し「先進地に学ぶ事例研修」、「小・中学校間の連携・交流授業実施」、「町民を対象とした研修機会の提供」などに取り組んでいますが、更に、報徳のおしえに関する学習資料、指導資料作成についても重要な活動に位置づけ取り組む必要があります。

そこで、この度前豊頃町生涯学習推進アドバイザーとしてご活躍された笠松信一氏が、永年の研究の成果をまとめられた本誌を、本町報徳教育の指導書として活用させていただきたく増刷発行させていただくことといたしました。

この度の増刷に対し、ご快諾下さった笠松氏に深く感謝いたしますとともに、本誌の活用により本町の「報徳のおしえを基盤とした小・中学校連携教育」が更に推進することを確信して発刊のことばとします。

平成20年3月

豊頃町小・中学校連携教育推進会議

# 報徳のおしえ Q & A

## ○ はじめに

### 一、 にんげん「二宮金治郎」の生いたちと業績

Q1 金治郎は 幼少の頃どのように育ったか	1
Q2 金治郎は 自立をめざしどのように勉強したか	3
Q3 金治郎は 二宮家の再興をどのようにはたしたか	4
Q4 金治郎は 武家の財政立て直しにどう取り組んだか	5
Q5 武士になった金治郎の『桜町財政再建』は スムーズに進んだか	6
Q6 天保のききんを 金次郎はどのようにのりこえたか	7
Q7 幕府役人「尊徳」は どのような仕事をしたか	8
Q8 二宮尊徳の「仕法」とは何か	9
Q9 金治郎の少年期に生み出した「積小為大」とは	10
Q10 断食修行から生み出した「一円融合」とは	11
Q11 民主的手法「芋こじ」 つてなあに	12
Q12 世界最初につくった 信用組合「五常講」とは	13
Q13 「冥加金」とは 何か	14
Q14 晩年の尊徳は どのような仕事をしたか	14
Q15 「報徳仕法」のひろがり	16
Q16 二宮金治郎のおいたちを 略年表で見ると	17
Q17 二宮尊行・尊親 を 略年表で見ると	19

### 二、『きんじろう』と『尊徳』の裏話

Q1 名前は「金次郎」か「金治郎」か	21
Q2 戦後、なぜ「金治郎像」が消えていったか	22
Q3 これからの社会で「金治郎像」に何を期待するか	23
Q4 金治郎のかついだ「柴」はどこから どこへ	24
Q5 なぜ、柴を運んだか・・・「柴」のお値段は	24
Q6 金治郎は なぜ『林蔵』と呼ばれたか	26
Q7 どう、「積小為大」ということばを生み出したか	26
Q8 尊徳像を、なぜ「鶏鳴回村像」と言うか	27
Q9 農民を救った 「秋ナスの味」とは	28
Q10 なぜ、三はいで一俵の「斗拵」をつくらせたか	29
Q11 金治郎考案の 金融モデル五常講とは	29
Q12 財政再建の決め手に なぜ「分度」に着目したか	30

### 三、「報徳のおしえ」とは

Q1 『報徳訓』を やさしくすると	33
-------------------	----

Q2 「至誠」 つてなあに	34
Q3 「勤勞」 つてなあに	35
Q4 「分度」 つてなあに	36
Q5 「推讓」 つてなあに	37
Q6 「積小為大」とは	38
Q7 「一円融合」とは	38
Q8 「以徳報徳」 つて どういうこと	39

### 四 二宮尊親の北海道（豊頃開拓）

Q1 尊徳のまご 尊親の北海道移住の理由は	41
Q2 尊親はどのように 土地を見つけたか	41
Q3 尊親の二宮開拓は どのように	42
Q4 興復社の開墾と経営は どのように行われたか	43
Q5 興復社 牛首別農場の農作物の変遷は	44
Q6 興復社の人々のくらしは どのように	45
Q7 牛首別報徳会とは どのような活動をしたか	46
Q8 心田開発と地域の創造はどのようになされたか	47
Q9 自治による村づくりは どのように進められたか	49
Q10 「依田勉三」・「関 寛斎」との交流は	51

### 五 報徳のおしえを 学ぶガイド

Q1 「報徳」研究のねらいは	53
Q2 「報徳」の 今に通じる場所は	53
Q3 「報徳のおしえ」から 今の世に送るメッセージは	55
Q4 尊徳の「心田の開発」とは	57
Q5 二宮尊徳ゆかりの地とは	58
Q6 いま受け継がれている「報徳サミット」とは	59

### 六 生涯学習部会研究のまとめ

① 研究主題 ② 研究動機 ③ 研究計画 ④ 研究方法	61
⑤ リーフレット作成のもとになる考え方 ⑥ リーフレット	63
⑦ 報徳に関するアンケート調査	67
⑧ 報徳の授業研究	70
⑨ 道徳指導資料	77

### 七 二宮尊徳ゆかりの地を訪ねて

・「小田原」から「今市」まで	85
----------------	----

編集を終えて	94
--------	----

# 一. にんげん「金治郎」の生いたちと業績<sup>ぎょうせき</sup>

## Q 1 金治郎は 幼少の頃どのように育ったか？

**A** 神奈川県の小田原市は、昔城下町として知られているが、その北部に栢山<sup>かやま</sup>という地域がある。

この一帯は富士山ろくに源をもつ酒匂川<sup>さか</sup>によって作られた足柄平野<sup>あしがら</sup>の中心部で、豊かな農村地帯であったが今は住宅地になっている。

今から220年前の天明7年(1787)、二宮金治郎はこの栢山で生まれた。金治郎の父利右衛門<sup>りうえもん</sup>は「栢山の善人」と呼ばれ二町三反(2.3ヘクタール)の地主で、何に不自由のない平和な毎日の明け暮れであった。

しかし、金治郎の生まれた天明7年は、幕府の政治にも暗い陰がさしかかった年であった。このころ、各地に飢饉<sup>ききん</sup>や天災がうち続き、それにつれて百姓一揆<sup>いっき</sup>(農民が税金の引き下げなどをもとめて騒動<sup>そうどう</sup>をおこすこと)や打ちこわし(都市の生活に苦しむ人々が米屋や金持ちをおそって略奪<sup>りやくだつ</sup>する騒動)が起こった。金治郎一家の生活への不安は、早くも彼が生まれて四年後に始まった。

寛政3年(1791)8月、関東地方に大暴風雨が襲った。朝から降り続いた雨は夕方から大嵐となり、夜になってますますはげしく、ついに酒匂川の堤防<sup>ていぼう</sup>がいたるところで切れて水が奔流<sup>ほんりゅう</sup>し、栢山の被害は大きく利右衛門の土地はほとんど砂礫<sup>されき</sup>の下に埋まってしまった。父利右衛門は埋まった田畑を元どりにするために懸命に働いた。水害で収穫が全く無いなかで殿様に治める年貢米(税金)はそれほど減らせてもらえず、貧乏のどん底に落とされていった。

こうしたなかで、利右衛門は心労から病床に倒れ、十歳を越した金治郎は、父に代わって酒匂川の堤防工



金治郎の生まれた家

事に出たが、働く人たちのあしでまといとなった。こうした金治郎の手助けもむなしく父利右衛門は亡くなった。

父が死んでからは、金治郎は母を助けるため朝早くから懸命に野良仕事を手伝い、夜は遅くまで縄をなつた。富士山が雪化粧をし、箱根連山から冷たい北西風が吹く頃になると薪取りが始まる。箱根山の中腹にある栢山村の入会山（共有林）へ4キロの道のりを毎日のように重たい薪を背負って家に運んだり、小田原の町へ売りにもでかけた。しかし、彼の懸命の努力にもかかわらず家運は傾く一方で、母も過労のため36才で死んでしまった。

この年またも酒匂川が氾濫し、わずかに残っていた土地も再び土砂に埋もれてしまった。親を失い土地を失った兄弟は途方に暮れて、昼夜泣き明かした。そこで親戚が集まり相談の結果、第二人は母の実家に引き取られ、金治郎は隣の叔父万兵衛の家に身を寄せることになった。金治郎はこのとき16才になっていた。

こうして金治郎の家が破産したのは、働き手の父母をあいついで失ったという不幸の外、二町もの土地をもっているにも一度や二度の水害で家を持ちこたえることのできない、当時の政治のしくみがあったからである。徳川の封建制のもとでは、農民にとって年貢

（租税）は非常に重かった。四公六民といい、五公五民といい、六公四民といい、収穫の半分前後が年貢である。この他にもいろいろな負担があった。そして、たとえ天災のため不作が続いて収穫が減っても、年貢の減免は思うようにはいかない。そのため、やむを得ず借金をするようになり、やがて土地を人手に渡し没落の道をたどっていくことになる。



## Q2 金治郎は 自立をめざしどのように勉強したか？

A

金治郎は16才から18才まで、伯父万兵衛の家で過ごした。

伯父は、金治郎を立派な百姓にして一家の再興をはからせようと厳しくきたえた。

しかし、金治郎は幼少期から読書が好きで、家にあった童子教・実語教といった書物を父から学んだ。まわりの山々を見ながら「山高きがゆえに貴からず、樹あるをもって貴しとなす」（実語教）と声を張り上げてその意味をかみしめた日もあった。

また、柴を担いだ入会山の往復の道すがら、大きな声で暗唱したのは「大学」という儒教の難しい書物の一節だったと伝えられている。



油がもったいないと怒鳴られた

あるとき、金治郎が夜遅くまで本を読んでいるのを見つけ、「百姓に文字はいらぬ」「油代がもったいない！」と怒鳴った。こうした万兵衛の叱責によっても金次郎の向学心はくじけなかった。彼は伯父に迷惑をかけない方法をと考え、燈油の原料である菜種の栽培を思いついた。

友人から菜種5勺（0.5リットル）を借りて、近くの荒地に撒いた。それが翌年になって7升（12.6リットル）以上の収穫となった。また、この年道端で拾った稲の苗をもったいないと思い、

荒田の水たまりに植えておいたところ、秋には一俵（60キロ）の米がとれた。わずかな種やひとにぎりの苗が、やがて予想外の収穫となる、小さいことの積み重ねが大きなことに発展するという「積小為大」という考えに至っている。

この「積小為大」が金治郎の座右の銘となり、二宮家の再興に結びついたと言われている。

### Q 3 金治郎は 二宮家の再興をどのように果たしたか？

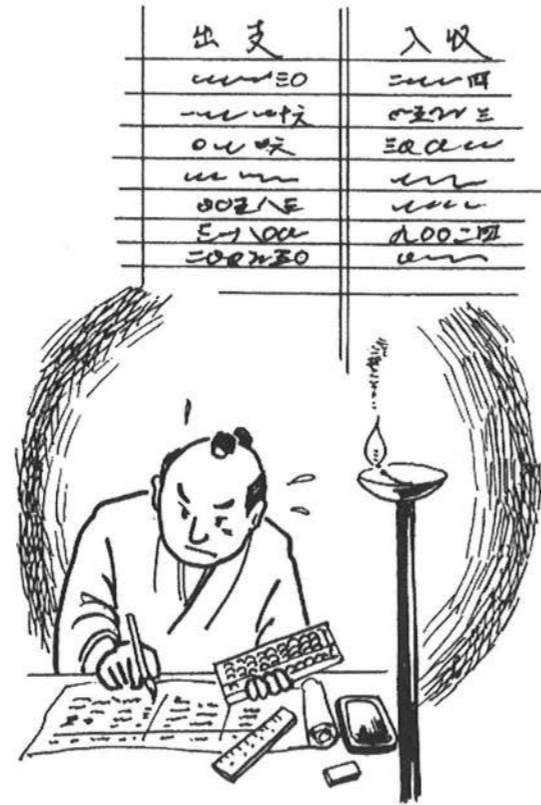
**A**

19才になった金治郎は、伯父万兵衛の元を離れ3年ぶりに無住の我が家の再興に戻った。くもの巣を払い、壁のくずれを直し一人住まいが始まる。

金治郎は、毎日日記をつけ生活のもとになる金銭の出入りを克明に記録したり、学問を深めていく過程で身に付けた合理主義（ものごとをすじみちやみとおしを立てて考えていく考え方）を貫く人であった。

・・・ただ馬車馬のように自分の土地を開墾するだけの普通の百姓の働きだけでは、家の再興は到底無理と判断、荒れたままの田や畑に鋤を入れ、その合間には、村内の家々にやとわれて働き賃稼ぎをした。彼は懸命に働き人も嫌う荒地の開墾には力を尽くした。だが、開墾ができてしまうと、それを耕すことはせず、それを人に任せて、自分は薪や米を小田原の城下町まで売りに出たり、また、米や金を他人に貸し付けて利子を得たり、武家に奉公して給金を得ることに力を尽くした。

このころ、全国的に武士の学問が奨励され、各藩では私塾を普及したり、藩校を作ったりした。学問好きの金治郎は、18・19才のころ小田原の武家屋敷に出稼ぎに出かけ、家の外から好んで講義を聞いた。26才になった金治郎は、小田原藩の家老である服部家に住み込んだ。ここで、夜読書する三人の男子のそばにすわって離れず、昼は学校にお供をして、教室の窓下に立ってひそかに先生の講義を聞いたという。こうして学問と蓄財を両立させながら、着実に、しかもかなりのスピードで一家復興を果たしていった。24才には一町五反（1.5ヘクタール）近くの地主となった。文化14年（1817）、金治郎31才になり、妻を迎えて一家の独立をなしとげた。父の残した財産を上回る三町八反（3.8ヘクタール）を所有する一流の農家になった。



### Q 4 金治郎は、武家の財政立て直しにどう取り組んだか？

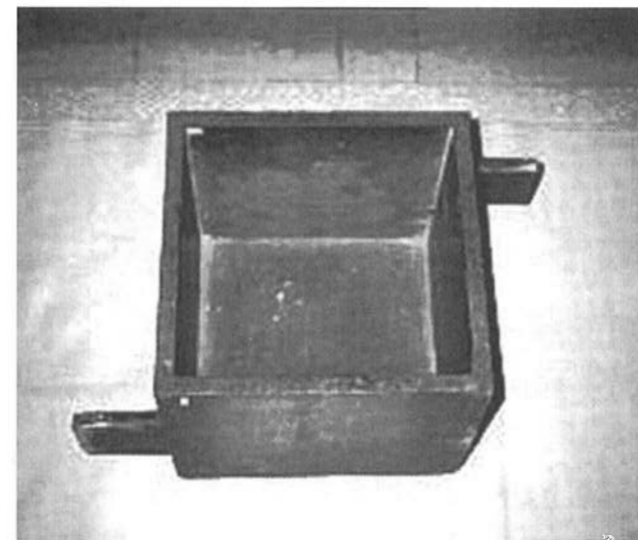
**A**

当時、小田原藩に家老職をつとめた服部十郎兵衛という人がいた。家老といえば、大名に仕える家臣として最高の地位にある武士であるが、非常に生活は苦しかった。

それは、服部家が藩から受ける一年分の給料は、表向き千二百俵の米であるが、実際には四百三俵しかもらえず、そのうえ二百五十両の借金をかかえていた。こうした状況の中、武家屋敷に奉公をしながら一家の再興を果たしたり、周辺の人々の借金の返済などの相談にのったり、周辺の人々の信頼を得ていた。金治郎に、服部家の財政の立て直しを依頼されたのも当然のなりゆきであったと言えよう。

まず、金治郎は服部家の帳簿一切を調べて、収入と支出の実際を細かく分析した。その結果約束の五年間、支出を大幅に減らし出た余裕を借金の返済に当てるため「食は必ず飯と汁に限り、衣は必ず綿布に限るべし、必ず無用の事を好むべからず」ということを主人をはじめ奉公人に至るまで誓わした。この頃、金治郎は窮乏する藩士の救済のために「5常講」を考えだした。5常講というのは、節約したお金をみんなで積み立てておき、困った人が出ると、これを貸してやるという方法で、今日の信用組合と同じような制度である。5常というのは、「仁、義、礼、智、信」の5つの徳の事である。

また、金次郎は長年の課題（父利右衛門の頃から農民を苦しめていた年貢米を計る不統一であった升）斗升の改正にも取り組み農民を喜ばせた。



二宮通尚さん所有  
小田原市寄託（尊徳記念館所蔵）



## Q5 武士になった金治郎の「桜町財政再建」は、スムーズに進んだか？

A

小田原藩主大久保忠真公は、指導力があり経済に明るい金治郎を百姓から武家に取り立てて、藩の財政建て直しをやらせようと考え桜町（栃木県二宮町）の復興計画を承認させた。

文化6年（1809）金治郎37歳の時、田畑家財をすべて売却清算し親子三人で桜町に移住した。

翌朝から、金治郎は4時に起き、夜は8時まで一軒一軒を訪ねて回った。

（鶏鳴廻村）村民の働きぶりや暮らしむきを詳しく調べると共に仕事を怠けている者に厳しく注意し、勤勉に立ち働くものには褒美を与えた。また、村民に投票を行わせて行いのよい者や、働き者を選び出してこれを表彰した。

こうしたやり方で、百姓に働く喜びや意欲を高め、本来の目的とする荒地の回復と財政再建にとりかかろうとした。在来の農民を大切にすると共に、農家の二・三男や他村から入植させた百姓（入百姓）を厚く保護した。

ところが、長年の悪風にしみた村民や役人たちの中には、こうした変化を喜ばない者もいた。特に六年目に上役として小田原から赴任してきた豊田正作はことごとく金治郎の奮闘に反対し、妨害や圧迫を繰り返した。金治郎にとって、桜町仕法の成果が着々と現われつつあった時期でもあったので、それ以来一向に事業が進展しない状況は大きなショックであった。

・・・挫折感に苦しむ金治郎は、とうとう三カ月間ほど行方をくらます旅に出、千葉県成田山不動尊に籠り断食修行を行うこととなった。

農民出身の指導者（武士～地方公務員）になった金治郎への反発をどう取り除くか？自分の前に立ちはだかった桜町での大きな障害を、どう乗り越えるかいろいろと悩み、断食をしたり神や仏にも祈るさまよえる旅であった。

・・・21日間の断食と瞑想を終えた金治郎の胸には、すでに苦しみは取り除かれ悟りがあった。それは、「一元融合」・・・「人には絶対の善人、悪人というのではないのだ



から、誠意をつくせば、人の心を動かすことができるはずだ」だから、「不動明王」のごとくたとえに火がもえていても決して桜町から動くまいという固い悟り（決意）を開いたのである。

また、彼が三カ月にわたり姿を消している間に、桜町の様子も変わっていた。金治郎の支持者たちは、彼の行き先を探す一方で、次々に江戸に出て小田原藩の役所へ桜町仕法（復興事業）の継続を嘆願するようになっていた。

その後は、桜町にもどった金治郎の仕法（新田開発等）は、多くの人々の理解と協力により、順調に進み着々と成果を上げていった。

天保2年（1831）、約束の十年の満期を迎えた。桜町領は、この間農家戸数、人口も増え、荒地は減り、用水路や道路もよくなり、農家の収入も増し、また人心も改まってきた。年貢米は千八百九十四俵となり、文政4年の千五俵に比べ倍増し桜町領の再建は成功した。

## Q6 天保のききんを、金治郎はどのように乗り越えたか？

A

天保のききんの時に、次のような金治郎の逸話が残っている。

天保4年（1833）の夏のはじめ、幾日も雨がふり続いた。そのころ宇都宮の農家でご馳走になった茄子が、いつもと味が違って、ちょうど晩秋の茄子のようだった。おどろいて、その家を飛び出した彼は、田の稲や道端の草を注意深く調べた。どれも葉の先が弱っている。これはただ事ではない。土の中は夏だが、地上にはもう秋がきている。

金治郎は、早速農民たちに「今年は凶作になる。畑一反にききんに強い稗を撒きなさい。そのかわり畑一反分の年貢は出さなくてよい」と命じた。

百姓達は、いくらえらい金治郎でもその年の豊凶などわからないと思ったが、金治郎を信頼し従った。ところが、金治郎の予想は当たった。関東や奥州一帯は雨の多い冷夏となり、結局凶作となって飢えに苦しむ人々が多く出たが、桜町領だけは稗のおかげでだれも飢えるものはいなかった。

日ごろから研ぎ澄まされた感覚を持って自然と接し、毎年天候と作柄の記録を続けている金治郎には推測されることであった。しかし、金治郎はもっとひどい凶作がくると考え、領内に雑穀を多くつくらせ、貯蔵させておいた。

尊徳の予想は的中、天保7年（1836）、全国的に天候不順で大凶作となり、翌8年にかけて各地に多くの餓死者が出、また百姓一揆や打ちこわしが起こった。（有名な大塩平八郎の乱は天保8年2月）

金治郎の活躍（天保のききんで、桜町領の餓死者を全く出さなかった）を聞きつけた小田原藩主 大久保忠真は金治郎に小田原藩領内の救済を命じた。しかし、金治郎の最も理解者である大久保忠真の死後、再び金治郎批判が渦巻いた。それは、一介の農民を藩政の一端に参画させたことへの反発、また、金治郎の仕法を「上を制して下を厚くする」ものだと警戒する空気が小田原仕法を中途半端なものにしてしまった。

また、天保年間、金治郎の仕法は桜町領の狭い枠をこえて旗本領の青木村や下館藩（茨城県）など関東を舞台に、独特な農村立て直しに取り組んだ。

## Q7 幕府役人となった「尊徳」の仕事ぶりは？

**A** 天保13年（1842）、金治郎が56歳のとき江戸幕府の老中水野越前守忠那から突然、勘定奉行所（幕府の財政をあずかる重要な役所）に出頭するよう呼び出され、幕府の直臣（御普請役格）にとりたてるという命が下った。このとき、「尊徳」という名を与えられ、今でいう国家公務員となった金治郎に与えられた最初の仕事は、利根川分水路（千葉県印旛沼）の調査であった。

尊徳の現地調査に基づく分水工事仕法案は、「非常な難工事であるから、まず周辺の貧しい村々を復興しなければならない。分水工事を実施するためには、その通路となる村々の人の心をつかんでおく必要がある。14万両の金を任せてもらえば、窮乏にあえぐ村民を救い、その後村の立て直しを図る。そうすれば、工事が何十年かかろうと、年々の財源を無



二宮尊徳

限に生み出していくことができる。という農民の立場にたった独特なものであった。

しかし、この意見は農村の実態を無視し、性急な工事をのぞんでいた幕府側のとりあげるところとはならなかった。

弘化元年（1844）、尊徳の最後の仕事として、ついに日光仕法の命が下った。尊徳は2年余りを費やして仕法ひな形84巻を完成し幕府に提出していたが、実際の日光仕法は、嘉永6年（1853）に着手された。

当時の尊徳は高齢であり息子の尊行を同行して74村を廻村、指導したが病弱になったため、以後は息子尊行や富田高慶らの門人により引き継がれ予想以上の成果を上げた。

## Q8 二宮尊徳の「仕法」とは何か？

**A** このような、金治郎の考え方にもとづく地域立て直しの事業を「仕法」とよんでいる。仕法には、一家の借財整理もあれば、一村の復興もあり、藩全体の経済の立て直しもあった。なお、仕法のほかに「報徳仕法」とも「趣法」とも「仕方」とも言うことがある。桜町仕法の成功がきっかけとなり、天保年間、金治郎の仕法は桜町領の狭い枠を越えて全国に広まり、東郷村をはじめ鳥山藩、下館藩の建て直しをつづけながら最後に相馬藩の再建に乗り出した。



老体となっても…

弘化元年（1844）、晩年の尊徳は、日光御神領の荒地復興計画をたてよという命を受けた。幕府は直ちに見込み書の提出を命じたが、尊徳は現地を見ずにすぐにはできかねると断った。なぜなら、尊徳の仕法書は現地を何度も調査し、現地の人々の暮らしぶりや現状を踏まえ、どのように取り組めば成功するのか、見通しをもった計画書でなければ成功しないということを知っていたからである。

…しかし、尊徳の主張に反し、幕府の命令は変わらなかった。

このころの尊徳は、70歳に近づき体の衰えを感じていたから、自分の手を離れ誰にでも実施できる仕法のひな型をつくることを考えた。・・・長男の弥太郎（尊行）と多くの門弟が協力し2年3カ月をかけ仕法ひな型84冊が完成した。これは、これまでの尊徳の体験の集約から生み出された、後世に伝える仕法の基準書であったので彼には大事業であった。このころ、67歳の尊徳は病気にかかっていた。

それでも、少しでも病状がよければ、日光にやってきて廻村を続けた。真夏の太陽が照りつけ、草いきれで息苦しく、ふみつける土は熱灰のようでもあった。それでも歩かねば地域の実情がわからないといって駕籠にも乗らず足を運んだ。・・・とうとう無理がたたって病気が再発し寝込んでしまった。しかし、桜町の時とは異なり息子や多くの門弟がおり、仕法のひな形もあり事業は着実に進行した。

死を迎えるにあたり、尊徳は弟子達に「決して、ことを急ぐな、決してあきらむな」と諭し、最後に「予を葬るに分を越えることなかれ、墓石を立つることなかれ、只その傍らに松か杉を一本植えおけばそれにてよろし。」と遺言、70歳でこの世を去った。

## Q9 金治郎の少年期に生み出した、「積小為大」とは？

**A** 「小さなことでもたゆまず継続し積み上げていけば、必ず大きな結果が報いられる。」という考え方である。この言葉は、二宮金治郎の貧しく苦悩に満ちた少年時代の生活から生み出された。

金治郎は15歳で両親を亡くして一家離散、その後は伯父の家に引き取られることとなる。こうした逆境の中、金治郎は新しい目標を立てた。

それは学問である。土地を失った農民は何によって身を立てるか？学問よりほかはないと考えた。日中の仕事が済むと金治郎の読書が始まった。

しかし、伯父は「農民には学問



小田原市立報徳小学校学習田

はいらん！」と言い、羽織を行灯<sup>あんどん</sup>にかけ光をもれないようにして学問に励む金治郎に、「油がもったいない！」としかりつけた。

そこで金治郎は、友人から一握りの菜種を借りて川辺の空き地に蒔いた。翌年菜種は7升以上の実りをみせ、約1升の油を手に入れた。また、初夏のころ道端に捨てられていた稲苗を荒れ田の水たまりに植えておいたところ、秋には1俵（60キログラム）におよぶ米が収穫された。今も、この捨て苗の地が、小田原市立報徳小学校学習田として残され、子どもたちの体験学習の場となっている。

金治郎は、自然の素晴らしさを知るとともに、「小さな努力の積み重ねが大切」（積小為大）という考えを学んだ。こうした若い頃の経験の中から得た原理が、後の金治郎の生き方やその後の尊徳の業績に結びついていったと考えられる。

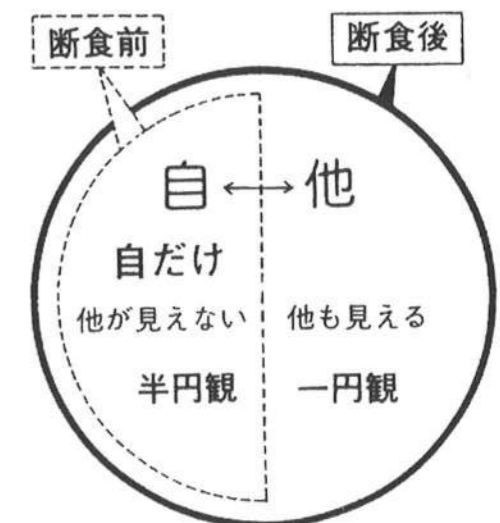
## Q10 断食修行から生み出した、「一円融合」とは？

**A** 世の中は、善悪・貧富・男女・強弱・遠近・賃借など、対立あるいは対称となっているものがいっぱいある。尊徳はこれをみんな一つの円の中に入れ、それぞれの「徳」が「一円融合」することにより、世の中が生々発展すると悟った。自分の立場だけから、一方的に観るのではなく、対立するものを一つとして観る。人は自分の好きな方に偏る性格を持っている。もともと一円のものにも己という境を立てて観るため、円は二つに分かれ己は一方に固執してしまうものである。

もともと農民であった尊徳は、武士となって桜町仕法を推進する時、多くの抵抗と反発に合う事になった。

尊徳は成田山で断食修行をし悟りを開くまでは、自分が絶対に正しいと信じて、仕法を妨害する人は悪人であって憎い人だと思っていた。

ところが、「一円観」を悟ってみると、そうではないことがわかった。反対者には反対者の理由もあるし、そういう反対がでる事は、まだ自分の誠意が足りなくて、反対されてしまうのだと悟ったのである。



## 「天地の 和して一輪 福寿草 咲けやこの花 幾代ふるとも」

また、「一円融合」は、自然界に例をとつても言える真理である。

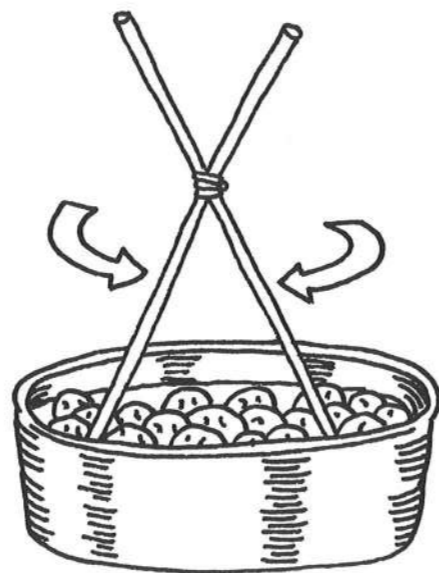
この尊徳の道歌は、一粒の草の種が地に落ちて芽が出、種子自身の持つ生命力と太陽、空気、水土との限りない天地の恵みが一円融合し、福寿草という美しい花を咲かせるという真理にもとづくものである。

尊徳は身分差別のきびしい対立の激しい封建社会を、この一円観の立場から説き、すべての人間が幸福に暮らせる社会の立て直しを主張した。上に立つ領主と、下に従う領民の間にも、その利害損失が一方にかたよることを認めず、領主には「民は国の大本である」こと、人間としてみな徳を持った尊い存在であること、従って年貢の搾取、重税の取り立てをやめ、領民に大きく譲る仁政を説き、領民には自己の尊い人間性にめざめ、自主的、計画的に勤労し、無気力な生活から立ち直り、分度～推譲によって貧苦から脱し、領主領民相和して両方とも栄えて両全の道を強く訴えた。

また、尊徳は当時の男尊女卑の考えも強く否定し、男がなければ女はなく、女がなければ、男もなく、男女相和して家庭は存在し、社会が成り立つ。男は男だけでは欠けたものであり、女も女だけでは欠けたものであり、男女が合うしてはじめて一円な人となる。男の尊さ、女の尊さを互いに認め、男は女を助け、一円融合するところに完全な人間ができあがると言っている。

### Q 11 民主的手法の「芋こじ」ってなあに？

**A** 昔、北海道の開拓農家で、新しいも(ジャガイモ)の皮を大量にむくときは、右図のやりかたで芋の皮をむいた。まず、同くらいの長さの木の棒を用意し、それを真中より少し下を紐で結わえ、それを桶に入れた芋がかくれるほどに水をはった中に入れ左右の手でそれをもった棒を開いて交互に動かす。すると、芋は桶の中を左に右にゴロゴロと動きまわり、こじ棒にこすれる以上に芋どうしがこすれあって、泥が落ち皮がはげ、スベスベした白い肌の芋になることである。



これは、芋は人間であり、泥や皮は人の慾心のねじれ、怠惰などを表わしている。こじ棒は司会者役で、芋が擦れ合う手助けを芋どうしが擦れ合うということは、参加者が徹底した意見交換ができ、切磋琢磨とお互いに高まることのできるのです。芋こじのとき、桶から外にとび出る芋はひろって桶に戻したり、協議を離れてよそ事を考えているような人を上手に協議にひきこむのは、この「こじ棒」にあたる「司会者」の役割と言える。

尊徳は、農村指導でよく「寄り合い」(集会)をもっているが、この時も「芋こじ」と称し、農民相互の知恵を出し合い、すべての情報を公開した。それによって農民達の自発性と相互教化を図り、相互扶助をすることを目的としていた。これはまさしく真の民主主義といえるものであった。

豊頃二宮地域の開拓(二宮尊親)においても、開拓の疲れから体を休めるための「農休日」とあわせて全員による「寄り合い」がもたれていた。

### Q 12. 世界最初につくった信用組合「<sup>ごじょうこう</sup>五常講」とは？

**A** 尊徳は、服部家の借金整理に合わせ、中・下級武士の借金返済を目的とした「五常講」という互助金融制度も作った。そもそもこのもとは、尊徳が服部家の役人時代、要人や女中が借金で苦心しているのを見て、当人たちに代わっての資金運用や、その人の収入に見合っ分度生活の面倒を見たが、仲間うちとの甘さから預ける金がへり借りる側に片寄ってお金が廻らなくなった経験から口約束では仕事が進まず、お互いの不振を招くとの考えから、その基本に契約が据えられた。五常講は、儒教にある五常、すなわち仁義礼智信という五つの根本原理をあてはめたもので、「金銭の積み立てや貸借では、確実に約束を守るのが最大要件」ということで、その意味合いは、仁義礼智信の五つは「信」の一字に要約されている。

この五常講はドイツのライフアイゼンで世界で最初に作られた信用組合より42年も早く制度化され、この「五常講」こそが、世界最初の信用組合であったと言えよう。



### Q 13. 「<sup>みょうがきん</sup>冥加金」とは?

**A** 江戸時代、営業を許可された者が、幕府または領主に納めた金銭。のちに、幕府が豪商にわりあてた献金のことです。しかし、二宮尊徳がいう「冥加金」はそれらとは違っていた。

尊徳は、善行表彰をいろいろな形式で行いました。農具を与えるとか、無利息金を貸すとかしました。それらは、村人の投票によって決めました。一軒に一人が投票権をもち、未亡人でも投票資格がありました。かって連合軍総司令官マッカーサー元帥のもとで活躍した新聞課長インボーデン少佐が、日本における民主主義者として尊徳をたたえ、元大統領リンカーンに比すべき人物と評価しました。

さて、その尊徳が貸し付けた無利息金は五カ年賦となっていました。そして、貸し付けた翌年から、その元金の二割ずつ返済させました。つまり、五カ年で完済させるようになっています。人々は無利息金をありがたく思い有効に利用しました。それは村人たちにより認められて投票という形で選ばれたことによるが、根本的には神仏のおかげとして受け止めるべき性質であると尊徳は教えました。だから、完済後に神仏へのお礼心でいくらか（元金の二割程度）を推譲するのが習わしとなっていました。それが冥加金と呼ばれるものです。これがお金を借りた人の人道です。その冥加金が報徳金に加えられるので、貸し付けるお金は年々増えていきました。

### Q 14. 晩年の尊徳は どのような仕事をしたか

**A** 天保13年夏、金治郎は幕府の老中水野忠邦から突然呼び出しを受けて、幕府の役人（御普請役格の地位）にとりたてられ、「二宮金次郎尊徳」と名乗るようになった。

そして、彼が最初に与えられた仕事は、利根川ぞいの<sup>いんばぬま</sup>印旛沼（千葉県）から東京湾へ分水路を作る測量調査員の一員になることでした。当時、利根川は毎年増水のたびに印旛沼を氾濫させ、周辺の田畑に大きな被害を与えていた。この印旛沼の水を江戸湾まで流しだす水路をつくれというものであった。この調査で、尊徳の心を打つたのは印旛沼の農民の困窮ぶりであった。尊徳は一カ月の調査後、次のような服命書を提出した。

「まず、14万両の予算で周辺の農村を立て直し、これを次々と広めながら、新しい財源と労働力を生み出し水路を延長する」という、まず農民を「救いつつ用水路づくり」

に取り組むものでした。

当然、この計画は水路の開発のみを早急に目指す幕府と対立、幕府の命令は下りなかった。結局その事業は、幕府の従来のやり方で着工されたが、失敗に終わっている。

弘化元年（1844）、尊徳58歳の時に日光神領の荒れた土地を使えるようにする計画を立てるように、という命令をうけた。待望の仕事を得て喜んだかれは、すぐ日光に出発するつもりでした。ところが、幕府は現地を見ないですぐ計画書を出すようにというのです。尊徳はすぐにはできないと断りました。それは実際の土地を見ないで立案するのは無理だからでした。

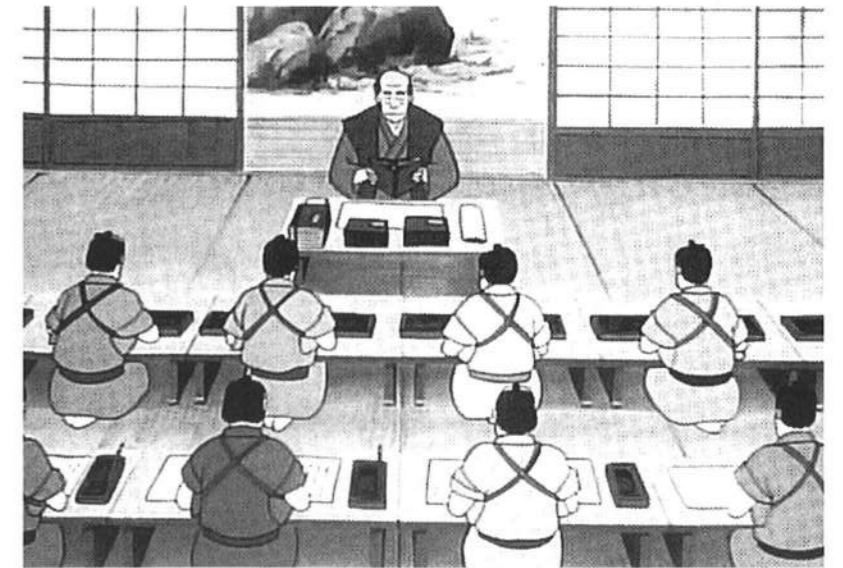
しかし、尊徳は「日光神領復興仕法の計画書提出を命じられたことはまことに有難いことだ。なぜなら、將軍をはじめ全国の大名が日光東照宮参拝に来るのだから、日光神領の復興を見れば、それを手本として全国各地、いたるところで復興仕法が行われるに違いない」といい・・・高齢になった尊徳は、自分の手を離れても、だれにでも実施でき、どの土地にでもあてはまる仕法のひな形をつくることを考えました。

仕法のひな形づくりには、長男の弥太郎（尊行）を含め、20人をこえる人々が協力しました。全精力を傾けた仕法のひな形づくりは3年の歳月をかけ、彼にとっては生涯の大事業『日光神領復興仕法雛形』84巻をまとめあげ、幕府に献上したのです。

しかし、日光仕法開始の下命は幕府からなかなかおりなかった。当時、鎖国政策に通商、開国をせまる外

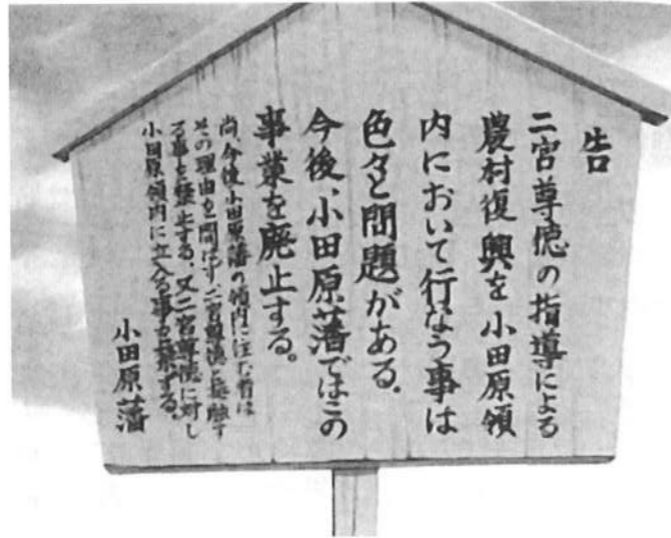
国船の沿岸警備に忙殺されていた幕府側の事情もあったこともあるが、尊徳の最も理解者であった小田原藩の大久保忠真公が亡くなって、こうした尊徳のやりかたを「上をうすく 下をあつくするもの」と批判、「小田原藩への出入りを禁止する」という農民出身の尊徳への反発、いやがらせも渦巻いていたからである。

この間、尊徳は福島県相馬藩の依頼に応じ、弟子の富田高慶を派遣し相馬仕法の着手したり、財政難の日光神領に近い村々の仕法に力を注いだり、寄付をしたり推譲の心は絶えることがなかった。



日光神領復興仕法発業の下命を受けたのは、嘉永6年の6月、尊徳67歳の時であった。以降、日光に着任した尊徳は高齢で病弱な身で回村したり、五カ村用水の開削など無理もたたり病気になるってしまった。

その後、事業は長男の弥太郎（尊行）に引継がれ、日光神領仕法は継続され成功を取めている。



### Q 15. 報徳仕法のひろがいは?

- ① 桜町の仕法 位置 栃木県二宮町・真岡市の三部落
- ② 青木村の仕法 茨城県真壁郡大和村
- ③ 細川領の仕法 茨城県筑波郡谷田部町
- ④ 鳥山の仕法 栃木県那須郡鳥山町外47カ村
- ⑤ 下館の仕法 茨城県真壁郡下館町外30カ村
- ⑥ 小田原の仕法 神奈川県足柄上、足柄下郡一円、静岡県駿東郡
- ⑦ 相馬の仕法 福島県相馬郡相馬市を中心とする226村
- ⑧ 日光の仕法 栃木県上都賀郡日光付近 89カ村
- ⑨ 幕府直轄諸仕法
  - ・大磯町 川崎屋孫衛門の仕法
  - ・藤山町 江川太郎左衛門の仕法
  - ・栃木県真岡付近・西沼村の仕法
  - ・利根川分水路印旛沼の仕法献策
  - ・茨城県水街道市大生郷村の仕法案
  - ・茨城県真壁郡棹ヶ島・花田新田の仕法
  - ・栃木県河内郡出口村・石那田村の用水仕法
- ⑩ その他諸州諸家の仕法

### Q 16. 二宮金治郎のおいたちを略年表で見ると?

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと	国内の動き
幸福な時代	1716	享保元			徳川吉宗が幕府の改革に着手(享保の改革)
	78	安永7			ロシアの船が来航し松前氏に通商求める。
	83	天明3			浅間山大噴火。天明のききん始まる。
	87	7	1		金治郎 神奈川県栢山に生まれる。
	90	寛政2	4		弟友吉(後の三郎左衛門)が生まれる。
一家苦難の時代	1791	3	5		酒匂川がはんらんし、田畑の大部分流出する。
	96	8	10		大久保忠真が小田原藩主になる。
	98	10	12		父利衛門が病気で倒れ、父に代わり酒匂川の工事で働く。わらじを作り工事の人に使ってもらう。
	99	11	13		松苗を200本を買い、酒匂川の土手に植える。
					弟 富次郎が生まれる。
	1800	12	14		9月 父 利右衛門が亡くなる。
	1	享和元	15		貧乏のどん底生活を味わう。年末の用意もなし。
2	2	16		母 よしがが亡くなる。 酒匂川の洪水。 金治郎はおじ万兵衛、弟達は母の実家に引き取られる。	
一家建て直しの時代	1803	3	17		菜種を収穫する。捨て苗から米一俵を得て「積小為大」を悟る。
	4	文化元	18		万兵衛方を去り、名主岡部方に出いりする。
	6	3	20		生家の近くに小屋を建ててて独り立ちする。
					田畑9アールあまり買い戻す。
	7	4	21		弟富次郎が亡くなる。
					米、金の貸付や小作料の収入がふえる。
10	7	24		田畑1.46ヘクタールとなる。	
				江戸・伊勢・関西を旅行する。	
11	8	25		学問のため本を買い入れる。	
				小田原藩家老 服部家の若党 <small>わかとう</small> になり、息子の教育係りなどをつとめ自分も勉強する。	

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと	国内の動き
隣人救助時代	1814	11	28	服部家の使用人を中心に「五常講」を作る。	
	17	14	31	中島きのと結婚。田畑3.8ヘクタールとなる。	
	18	文政元	32	服部家の立て直しを引き受ける。 11月 藩主大久保忠真から表彰される。	
	19	2	33	長男徳太郎誕生するが死亡。3月きのと離婚。	
	20	3	34	4月 岡田波子と結婚。年貢のますの改良がとり いれられ、藩士の五常講を作る。	
	21	4	35	金治郎 <small>ちやくなん</small> の嫡男弥太郎（尊行）生まれる。	
桜町再興の時代	1822	5	36	小田原藩に登用（名主役格）。 桜町領の立て直し命じられる。	
	23	6	37	田畑・家財を売り払い桜町に引越す。	
	24	7	38	長女 文子誕生。	
	28	11	42	桜町で反対や妨害を受け、苦しい日々を送る。	
	29	12	43	成田山で断食修行。帰ってから事業円満に進行。	
33	天保4	47	凶作を予知した対策をとる（秋ナスの話）。		
仕法が広まる時代	1836	7	50	<b>諸国大凶作(天保のききん)</b> 鳥山藩を救急援助。 桜町領の立て直しが終わる。	
	37	8	51	小田原藩のうえた人々を救う。大久保忠真死亡 鳥山藩の立て直し始まる。 <b>大塩平八郎の乱がおこる。</b>	
	38	9	52	小田原領、下館領の建て直し始まる。	
	41	12	55	桜町で谷田部・茂木・下館・小田原等藩や領の指 導続ける。	
	42	13	56	幕府の役人になる。利根川分水路測量調査する。	
	43	14	57	幕府の役人になる。利根川分水路測量調査する。 「尊徳」と名乗る。	
45	弘化2	59	相馬藩の農村の立て直しが始まる。		

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと	国内の動き
日光たてなおしの時代	1846	3	60	日光仕法のひな形完成 小田原藩の仕法を打ち切られる。	
	53	嘉永6	67	日光領の立て直しを頼まれる。 尊徳江戸で発病する。	
	54	安政元	68	<b>アメリカのペリー来航・ロシアの軍艦来航</b> <b>日米和親条約締結し、下田を開港する。</b>	
	55	2	69	尊徳の孫金之丞（尊親）誕生する。	
	56	3	70	10月20日、尊徳今市で亡くなる。	

注1 当時年齢は数え年で 注2 名は**金治郎**であったが、36歳の時**金次郎**と書くようになる。

## Q 17. 二宮尊行・尊親の略年表で見ると

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと	国内の動き
尊行・尊親へ受け継ぐ時代	1857	安政4	37	日光仕法の瀬川用水・轟用水の改良工事完成 函館奉行の要請により門弟を蝦夷地 <small>えぞち</small> に派遣 尊行が幕府から御普請役格に任じられる。	
	58	5	38	尊行配下の太友亀太郎が蝦夷地にわたる。	
	66	慶応2	46	日光、轟村の一村式仕法が完了する。	
	67	3		<b>薩長両藩の倒幕、徳川慶喜が大政を奉還する。</b>	
	68	4	48	尊行が仕法書類を相馬へ疎開、 日光仕法中止し、相馬に移る。	
	68	明治元		<b>年号が明治となる。</b>	
	71	4	50	二宮尊行が病死する。	
	77	10	22	二宮尊親（尊徳の孫）が富田高慶と共に相馬興復社 を起こす。	
	97	30	42	尊親が北海道十勝原野の開拓に着手する。	

## 二. 「きんじろう」と「<sup>そんとく</sup>尊徳」の<sup>うらばなし</sup>裏話

柴をかつぎながら読書をした親孝行息子の金治郎の話は有名であり、銅像となって今も残っている。

さて、この話は「向学心に燃えた親孝行者」の少年として美化され、修身の教科書にも取り上げられているが、当時の社会的経済状況の中では、どのような目的で、どのように扱われていたのかを推測し、お話をただ単なる根性物語にしない歴史の見方が大切ではなかろうか。



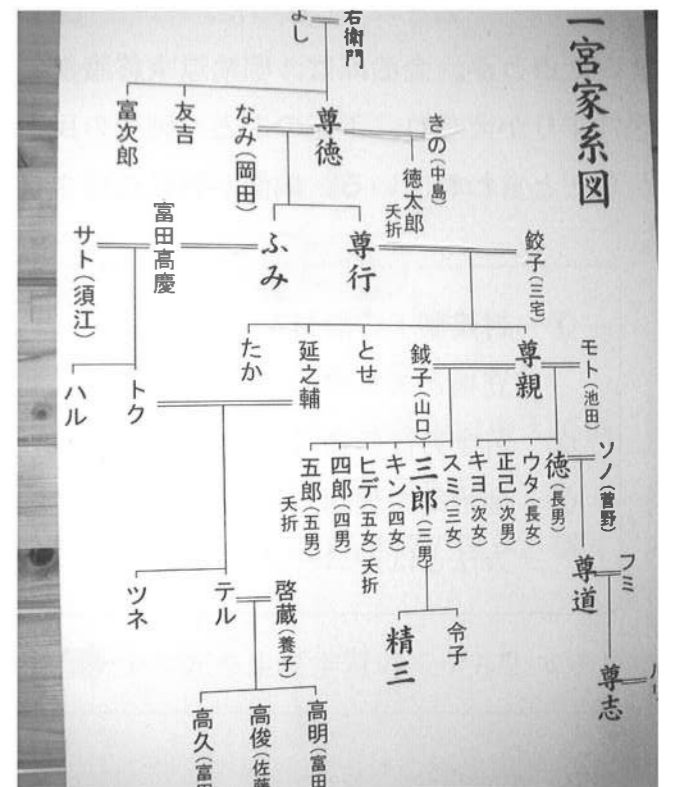
### Q1 名前は「金次郎」か「金治郎」か？

**A** 二宮きんじろうは、「金次郎」か「金治郎」かどちらが正しいか？

しかし、調べてみると書かれている書物の記述もまちまちである。そんなこと、「どちらでもいい」と言われてしまえばそれまで。

そこで、二宮家の家系を調べてみると「きんじろう」は二宮利右衛門の長男として、小田原栢山で生まれている。長男に「次」の字を使うのはどうも合点がない。

小田原の中流農民であるとするれば、家を継ぎ「お金を治め」家計をきりもりし



てほしいという親の願いがこめられていると見るのが妥当であろう。昔から、「名は体を表す」という諺がある。確かに、「きんじろう」は、よく働き、よく勉強もし金儲けも上手であったことがエピソードとして残っている。

ことの起こりは、「きんじろう」は農民の子どもでありながら出世をしたのがきっかけであると思われる。出稼ぎ先の服部家で、「金儲け」と「金の運用」が上手な金治郎を見込み、地方公務員として桜町の財政再建に当たさせた。

桜町の再建を果たすと、次に国家公務員たる幕府の役人に<sup>はってき</sup>拔擢されたのである。ここで、幕府の勘定所詰御普請役格「二宮金次郎尊徳」と命名され、この時に『治』が『次』に間違えられて記録された。または、農民出身だから「治める」はふさわしくないと金治郎に反発する役人が意図的に記したとも考えられる。

以上のような事実やそこから推測されることから、私が使う「きんじろう」の記述はいっさい「金治郎」とすることにした。

## Q2. 戦後、なぜ「金治郎像」が消えていったか？

**A** いま、十勝管内の学校に金治郎の銅像があるのは何校あるだろう。かって、どこの学校の庭にも見られた風景であったのに、戦後こぞって撤去されてしまった。・・・それでは、なぜ金治郎像がこのような運命にあったのだろうか。金治郎は、明治以来終戦まで修身の教科書に登場し、報徳思想が報国思想にすりかえられ、下記のごとく戦後の民主主義教育に逆行するものとして考えられたからだと言われている。銅像が戦後追放された理由としては

- ① 封建制下の農村指導者であるということは、民主主義の下の現代教育の立場とズレがある。
- ② 苦学力行の姿は、忍従を強いるから、教育基本法の趣旨に合わない。
- ③ 金治郎を理想人物として押し付けるのは、児童の判断を尊重する新教育方法とは逆コースである。

## Q3. これからの社会で「金治郎像」に何を期待するか？

**A** さすが心田塾構想による町づくりを進める「報徳の町豊頃」である。いま、豊頃町内には小学校・報徳館・える夢館等6体の金治郎像が学校や公共施設前に設置され、今も子供達や町民の目にふれることができることは嬉しいことである。


なぜこのような誤解を招いてしまったのだろうか。原因の一つは、あまりにも徳目中心で美化しすぎたきらいがある。もっと、「人間金治郎」という生身の理解がなされなかったからではないか。

二つ目は、「少年金治郎の美化」にとどまり成人したその後の「尊徳の業績」や「報徳思想の正しい理解」がされていないことにあると考えられる。

それでは、これからの時代の金治郎像は、どのように解釈すればよいのか・・・元静岡県掛川市長榛村純一氏は、下記のように生涯学習の原点として金治郎像を捉えている。豊頃町に於いても、生涯学習の拠点「える夢館」前に金治郎像が設置されていることもうなづけることである。



### 生涯学習の原点を金治郎像に求めたい

- ① 偉い人の銅像で、その少年期が銅像になったのは二宮金治郎だけである。
- ② 百姓の小せがれは勉強する必要がないと言われた時代に、金治郎は敢えて内発的に自ら進んで勉強をしたから美しい。これは教育の本質である。
- ③ 薪を背負って本を読む（働きながら勉強する）姿は、生涯学習で言う、働くことと勉強することは同じことだと言っている。  
(今、働くこと勉強することの分離金治郎を生涯学習のモデルとする)

## Q 4. 金治郎のかついだ「柴」は、どこから、どこへ？

**A** 金治郎5歳のとき、川が氾濫し、金治郎の家も土地も流失してしまった。金治郎14歳のとき過労でたおれた父親をなくし、まもなく母親も亡くしてしまう。親戚が集まって相談した結果、弟2人は母親の生家に、金治郎は伯父の家に引き取られ、兄弟バラバラに生活するという、不運な少年時代であった。

さて、金治郎の柴や薪は何処から入手し、どこへ持って行ったのであろう。親のいない金治郎には土地も里山もないのに、どこからどうして手に入れ運んできたのか不思議なことである。金治郎の住んでいた足柄平野の栢山村から西に半里（2キロ）歩くと足柄峠の麓にたどりつく。矢佐芝山、久野山、三竹山などの里山が入会地であった。この入会地を狩川に沿って二里ほど下ると小田原の市街地（11万石の城下町）があり、そこで売りさばっていたのである。金治郎の柴や薪はやはり入会地からのものである。村の共有財産である入会地で柴や薪を拾うにも、入山できる期間や採取できる量に厳しい制限がある。大人がやったら村人から咎められるのだが、金治郎は少年でありその境遇から大目に見てもらい、見て見ないふりをする村人の優しさがそこにはあったとしか考えられない。

## Q 5. なぜ、柴を運んだか ……「柴」のお値段は？

**A** 銅像「少年金治郎の背の柴」はリュックサック程度、いかにも軽そう。だが、実際には柴だけでなく薪も加え背負子にかつげりだけ載せ、荷は身長をはるかに上回っていたと考えられる。

なぜなら、両親をなくし貧乏のどん底の金治郎の生活を支える現金収入の重要な手段でもあったからである。



では、金治郎が柴を売った、二百年前の江戸時代と現在の一般家庭の家計費と光熱費の比較をしてみると、意外にも自給自足の江戸の方が光熱費の割合が高いことがわかり、金治郎の薪は非常に高く売れた事がわかる。

（「文芸春秋」平成17年11月号より）

江戸（小田原藩藩士小川太右衛門） ↔ 現代（家計調査年報02年版）

（貨幣価値を現代に換算すると） → 1両はだいたい10万円～20万円

一年の消費支出（1852年）  
24両2分2朱

（内訳）

食費～6両、諸謝礼～1両3分  
醤油～1両2分、炭～1両2分  
味噌～3分2朱、薪～2両  
水油～1両2分、掛払～6両  
親類音物～1両2 その他1両  
馳走客用～1両

飯を炊き風呂を沸かす薪や料理や火鉢に使う炭代を合わせ、

家計費の14.2%

一年の消費支出（2002年）  
323万8千円

（内訳）

略  
光熱費等への支出は  
21万2千7百円  
光熱費は

家計費の6.6%

## Q6. 「金治郎」は、なぜ「林蔵」とよばれたか？

**A** 25歳になった金治郎は、箱根道の風祭村に薪山を2分2朱（0.625両）で購入している。市街地から離れた雑木林などは文字通り二束三文の値打ちしかないので入手できた。商才にひいでた金治郎は、[薪山三倍]に気づいていたのである。市街で売る薪の値段は山代を一とすると、切り賃が一、運び賃が一で三倍になる。自分で木を切り、自分で運べば儲けが増える。

金治郎は26歳で小田原藩服部家の若党（奉公人）となった。若党になれば武士の従者として、武士の息子の勉強を教えに行くお供ができ、障子の外で学ぶことができるからである。また、休日に薪を担いで小田原の城下町や宿場を売り歩き、林蔵と呼ばれるようになった。勉学と金儲けの一举両得といところであった。

## Q7. どう「積小為大」という言葉を生み出したか？

**A** 菜種油と捨て稲苗  
父を亡くした金治郎は、伯父の万兵衛に引き取られ働かねばならなかった。学問をするには夜学をするしかなく、灯油も買えなかった。そこで友人に借りた一握りの菜種を堤防に近い荒地に蒔き、一年後には8升（14.4リットル）あまりになり、油屋で油に交換してもらった。また、道端に捨ててあった稲の残りを拾い、荒れた田に植えて、秋には1俵（60キログラム）余りの米を収穫した。

### 釜のススとり

金治郎が奉公人の時、同じ仲間の飯炊き女中にこのように忠告した。「釜や鍋の底につくススが入用だ、せつせと磨いてとってくれ。それが一升たまったら二文で買ってやろう。何升でも持っておいで」これで、燃焼効率がかなりちがってくる。よく磨いてあれば、十本の薪が八本で済む。一つの釜で薪を二本、別の釜で二本、風呂で三本と毎日



節約したものをためていけばかなりの量に増える。金治郎はこれをもって「積小為大」と言ったのである。

## Q8. 尊徳像を、なぜ「鶏鳴廻村像」と言われたか？

**A** 豊頃町役場庁舎前に設置されている「二宮尊徳像」は、昭和63年に小田原市の田島亨氏から寄贈された数少ない成人像であると言われている。

小学校の校庭にある「二宮金治郎像」とは、決して同一人物とは考えにくいものがある。なぜなら、金治郎は農民の子であり、帯刀しチョンマゲ姿の颯爽とした成人尊徳像（身長182cm、体重94kg）とは、あまりにもかけ離れているからである。

二宮尊徳は、小田原藩大久保忠真公より、その分家の宇津家領桜町（今の栃木県二宮町）の復興事業を懇請され、家財一切を売り払い桜町に赴任した。翌朝から地方公務員となった尊徳は率先垂範、農村の一番鳥が鳴く4時に起床し、夜は8時まで一軒一軒の農家を訪問し、農民の働きぶりや暮らしむきを調べ農民の立場になって指導した。

尊徳の銅像の表情は一見威風堂々にも見えるが、厳しさに耐える渋み（苦悶）のある顔でもあるように見える。農民あがりの尊徳に対して、これまで尊徳より地位の高かった武士や地元のボスが尊徳の仕事の妨害や反対をしたので、なかなか計画通りには進まなかったのも事実のようである。

尊徳は苦悩の末、成田山新勝寺にこもって21日間の断食修行をしたことがあった。そして、「一円観」という悟りを開くことができた。それは、世の中のあらゆる対立する物を一つの円の中に入れて観る立場。そして、その一つの円の中におさまることを「一円融合」と名づけた。

世の中には善悪・強弱・遠近・貧富・男女・明暗・労使・貸借等、対立（対称）するものが沢山ある。一円観で世の中を見ると、この世には絶対の善人も絶対の悪人もいな



い。善人にも短所があり、悪人にも長所がある。その長所を引きだすことが大切である。反対者には反対の理由があり、そういう反対が出るという事は、まだ自分に誠心が足りないからと悟ったのである。対立したままでは何も生まれない。「万象具徳」、それぞれの徳（よさ）を出し合い協力することにより世の中が生々発展すると言うのである。この後、反対や妨害も減り、桜町復興事業も大いに前進したと言われている。役場前の銅像を見るとき、この事実を知り農民の立場で奮闘した苦悩する姿として尊徳を見てほしいものである。

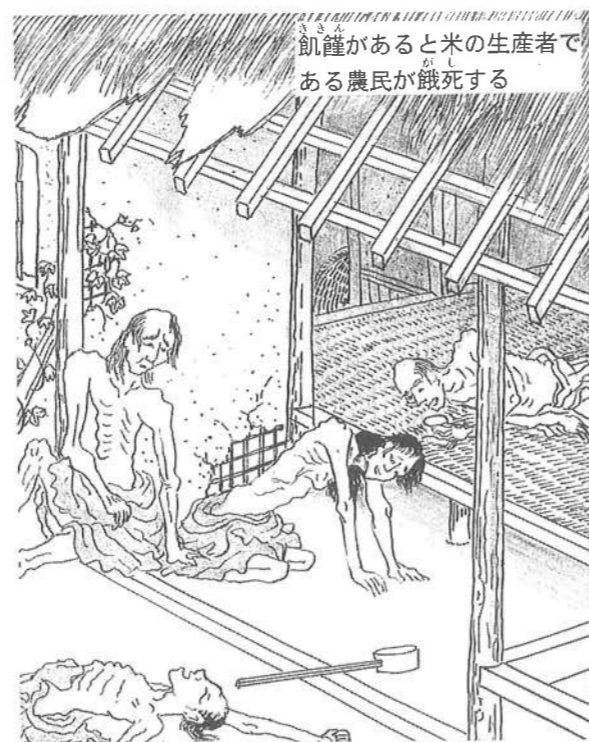
## Q 9. 農民を救った「秋ナスの味」とは？

**A** 江戸時代には何度も大きな飢饉におそわれている。中でも天保の大飢饉の時には、奥羽地方だけでも十万人の餓死者が出たとされている。

しかし、ある地方では一人の犠牲者もでなかった。それが、二宮尊徳の傑出した指導力の賜物であると言われている。

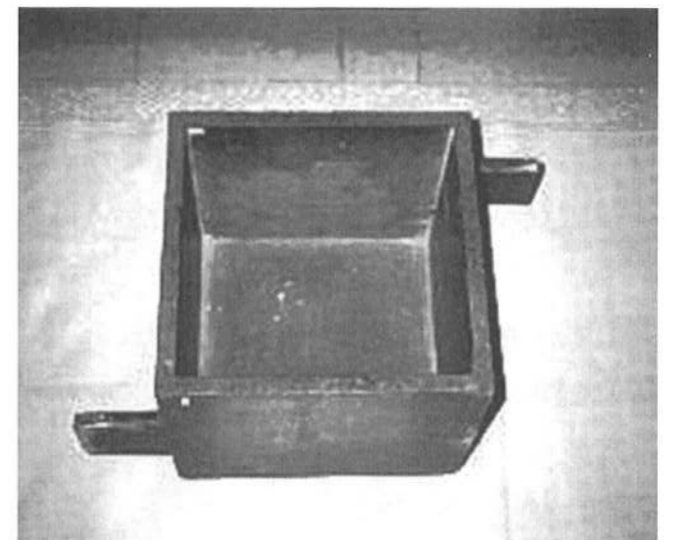
（平成18年NHK番組「その時歴史が動いた」でも放映された）

ある時、尊徳が廻村中たまたまごちそうになったナスの味がどうも普通ではなく、夏の始めだというのに秋ナスの味がした。これは凶作の前兆に違いないと考えたのである。現代ではほとんど野菜に匂がなくなり、微妙な味の違いを感じたとしても「ちよっと変だな」くらいが普通であろう。しかし、これは凶作の前兆と感じたところが尊徳の日頃の観察眼や洞察力の鋭さ、凡人とは違う感性の持ち主であったことがわかる。彼は、農民たちにすぐに稲をぬくよう指示したのである。当然農民の反発にあうが、説得を繰り返し、その後に冷害に強いヒエ等を植えさせたのである。その結果、その地域を飢饉から救うことになる。すでに成長している稲を抜かせるのは大変な決断であり、ほとんどの農民がそれに従ったというには絶対の信望があった証であろう。



## Q 10. なぜ、三はいで一俵の「斗枘」をつくらせたか？

**A** 金治郎は服部家の財政再建にかかわるが、小田原藩全体の年貢米をはかる斗枘の統一を提案し採用させる功績があった。諸藩の年貢米は大阪に回されて売却されていたが、小田原藩の年貢米を凶る斗枘が18種類もあり不統一で、農民を困らせていた。小田原藩では一俵は四斗一升だったが、ところが斗枘がまちまちだと四斗だったり四斗三升だったりした。公定では三斗七升だが、口米・延米など何升か付加税がつく複雑な納税法になっていた。そこで、金治郎は三杯でびたり一俵四斗一升となる新しいサイズの巨大な斗枘を作らせ認めさせた。このことにより、農民をこまらせる不正を防止するだけでなく小田原藩の米は取引先の信頼を回復し市場価値を高めていったと言われている。



二宮通尚さん所有  
小田原市寄託（尊徳記念館所蔵）

## Q 11. 金治郎の考案した金融モデル（五常講）とは？

**A** 五常講は、金治郎が紹介した低利融資制度（金融モデル）の到達点であった。五常とは四書五経の中の徳目のうち、忠・孝・悌を除いた「仁」「義」「礼」「智」「信」の五つの徳目である。

これは他人との関係を重視し、約束事を重んずる徳目である。例えば、十両借りるとすると、原則的には五年賦利息返済で年額二両ずつ五年で完済される。ところが、完済することができた人間には「五年間二両ずつ返済しても生活できたのだから、あと一年、二両支払っても大丈夫だろう」と、六年目に「冥加金」（お礼）と称し、もう二両推譲していただく」というやりかたである。六年目の二両は実質的な金利と考えていい。それだけでなく借金を返済しておしまいでなく「互いに推譲し合うシステムを尊重すること、借りたら返せ、貸したら無理な返済させるな」という信条が金治郎の投資ファン

ドを大きくしていった。分度が明らかになれば、これを上回る収入があれば、その収入は桜町領の復興資金として投資され、その結果、復興資金は荒地を起こすための用水堰などの土木事業、一軒一軒の農家が抱える借金を整理し返済させる低利融資制度の元本に遣われたのである。この金治郎の五常講は日本の協同組合の前身となる。

## Q 12. 財政再建の決め手に、なぜ「分度」に着目したか？

**A** 1822年、金治郎は小田原藩に登用され、桜町仕法に乗り出した。金治郎は財政破綻、労働人口の減少（三分の一）、労働意欲減退の桜町の改革に服部家やこれまでの経験から、「分度」を持って改革に臨んだ。

まず、金治郎は鶏鳴廻村をして農民の相談にのったり、徹底的に土地の状況や農民の実情を調べ上げた。そのうえ、無理のない年貢米を科学的に「分度」をもって決定し、行政にも緊縮財政の運営を求めている。次頁枠内が尊徳の桜町仕法。（桜町農民の土地状況と実態を科学的に調査し、可能な年貢米の量を分度をもって決定し農民に働く意欲と節約を求め、宇津家にも贅沢を廃する生活、節約の分度を求めて、財政の健全化を図った）



桜田陣屋跡（国指定史跡）  
1699（元禄12）年創立された役所跡で  
尊徳が20数年間居住した

## 尊徳の桜町仕法の手順

- ① 栃木県桜町領（二宮町）の人口は元禄時代1900人であったが、文化文政期はその三分の一に減少し生産力も減少していた。（桜町の家々は極貧で衣食足りず、人身荒廢の局地にあった。）
- ② 尊徳は、桜町の土地状況（生産力の実際）を詳しく調べ上げた。  
宇津家の石高は4000石（田6割で2500石、畑4割で1500石）  
しかし実際の土地状況は、  
田の荒地と生地の割合は7対3、畑の荒地と生地の割合は4対6、  
したがって、荒地率からみて宇津家4000石は（田750石、畑は900石しか生産できない）  
そこで、年貢が米4.4割なので750石に対し、330石  
畑の年貢は田より低くて3割、農民は自由に売る（金納）ことができたので田は荒地のまま放置しても畑に余力をまわした。
- ③ そこで、尊徳は過去の記録から農民が納めることが可能な年貢米を割り出した。
  - ・宇津家100年前の年貢米平均は、米3106俵、金納202両
  - ・宇津家直近10年の年貢米平均は、米962俵、金納130両

そこで、「古今盛衰平均台帳」をつくり、今後十年間の年貢高を決定、宇津家の支出はこれを超えてはならないと武家に節約を求めた。



### 三. 「報徳のおしえ」とは

#### Q1 「報徳訓」を、やさしくすると？



#### A1 かな「報徳訓」より …… 佐々井典比古作

- |    |   |  |
|----|---|--|
| 一連 | てんちのいのちでいきている<br>おやのいのちでいきている<br>いのちをしっかりとつたえよう                                   | せんぞのいのちでいきている<br>しそんにいのちをつたえよう   |
| 二連 | ぶんかのめぐみでくらしてる<br>おやのめぐみでくらしてる   | せんぞのめぐみでくらしてる<br>しそんにめぐみをつたえよう   |
| 三連 | ごはんのおかげでいきている<br>すまいのおかげでいきている<br>やまのおかげでいきている<br>こうばのおかげでいきている<br>みんなのおかげでくらしている | きもののおかげでいきている<br>たはたのおかげでいきている<br>うみのおかげでいきている<br>みせのおかげでいきている<br>もちばもちばでつとめよう |
| 四連 | きのうのごはんできょういき<br>きよねんのみりてことしいき  | きょうのつとめはあすのため<br>いつでもしっかりとくいかし   |

- 1 われわれ人間の肉体的生命は、父母祖先から子へ孫へと伝わり、終わることのない永遠のものである。
- 2 この天から与えられた生命を支えているのは富貴である。  
富貴、すなわち衣食住に恵まれ、豊かな社会生活、文化生活を営むことができるのは、父母祖先の代々の勤労・善行のおかげであり自分一代でできたり、無くなったりするものではない。  
よくこのことを感謝し、勤勉努力して子孫へ受けついでいかねばならない。
- 3 その富貴のもとである生産は、田畑山林（自然）の恵みと、これに積極的に働きかける自己の勤労によるものである。
- 4 去年の生産で今年の豊かな生活ができ、今年が生産で来年の安全な生活がなりたつように、計画的な暮らし（分度～推譲）をしなければならない。
- 5 これを貫くためには、天地自然の恵みや、父母祖先をはじめ、多くの人々の社会的協力のおかげで現在の自分が存在することをよく自覚し、至誠を持って実行しなければならない。

## Q2. 「至誠」ってなあに？

**A** 尊徳のおしえを「至誠」、「勤労」「分度」「推譲」の四つであらわすことができ、これを報徳の四綱領と呼んでいる。

最も核となるのが至誠であると言われている。

「至誠」は人間の根本を形成するもので「まこと」「まごころ」をもって人間生活を一心に貫き通すことであり、影ひなたなくまじめに生きることである。

尊徳は「至誠は神の如し」とも言っている。また、ひたむきに目標に向かって、まっすぐ一生懸



命努力するという教えで報徳の土台をなすものである。挿絵を例にすると、釜（豊かな暮らし）を支える三本足（勤労・分度・推譲）の鼎（かなえ）である。私たちは、今を充実させ明るい未来を発展させるため、「あかるく ひたむきに」、心の田を耕しつづけたいものである。

## Q3. 「勤労」ってなあに？

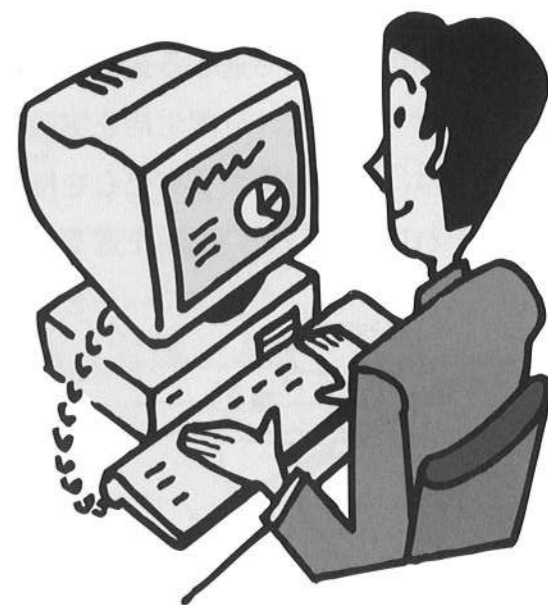
**A** 「勤労」とは、よくはたらくことを言い、人間は米一粒、菜っ葉一枚といえども自分の力だけではつくりだすことができない。  
すべて天・地・人、三才（三つのはたらき）の恩恵によるものであることを自覚した、徳に報いるためのまことのはたらきを勤労と言っている。人は働くことで食べ物を手に入れたり、生活することができる。また、働くことを通じて知恵を磨き、自己を向上させることができるという教え。

また勤労とは、めちゃくちゃに働くことではなく、工夫し計画的に働くこと、効率を高くすることが大切で、報徳のはたらきであることから、常に社会的視点にたって、社会公共の為に働くべきであると言っている。

昔の勤労観は、農業による生産労働が主で、「体を動かす」ことが前提になっていた。

しかし、現在は肉体労働だけでなく、パソコンを使った知的労働や福祉や文化活動、更には「学ぶこと」も含めた広い捉えが必要と考えられる。

町生涯学習部会では、人々のあらゆる職種・立場や生産活動において「生活を向上させる前向きな営み」を総称して「いきいき 小さな積み上げを」期待したいと考えた。



## Q4. 「分度」ってなあに？

**A** 「分度」とは、天分の度合いということであると言っている。「分」は人間に与えられた天分（条件）のことであり、その天分の中でどう生きるかと言う度合いを「度」ということである。尊徳が最も強調したのは経済上の分度で、「入るを量り 出を制する」こと、つまり分度の確立である。尊徳はまた、「国家の盛衰貧富は分度を守るか失うかによって生ずる。分度を守れば繁栄し、分度を失えば貧困に陥る。国家が衰貧に陥ると借財したり、人民からしぼり上げたりして国費を補うが、それは種子を蒔かずに刈り取ろうとするようなものである。そういう時は、分度を守り農民に恵み、荒地を拓くべきである。そうすればやがて税金が増して国が富むようになる」と、農民だけでなく領主にも分度を求めている。やさしく現代の生活に置き換えて言うと、分度は個人や家庭生活の収支のバランス、会社や工場・企業の経営、あるいは市町村や国の財政にも通じる最も大切な大原則でもある。言うならば、分度生活を実践する最も肝要なことは、自分を抑える克己心を持ち、自分の置かれている経済状況や立場をわきまえて、それにふさわしい生活を送ることが大切であり、見栄や外聞を気にしない勇氣を持つことであると言っている。



町教育研究所生涯学習部会では、この分度の考え方を広くとらえ、人が生きる上で、家庭・学校・地域（集団生活）における自己の立場や役割、自然環境や資源の問題とのかかわりを問うこと、すなわち自然や社会とのかかわりで「それぞれのよさ 自己を見つめる」生き方であると解釈をした。

尊徳は分度を立てるに際して、自然の摂理である四季にヒントを得て、総収入を四つに分ける「四分分度法」を考えだした。

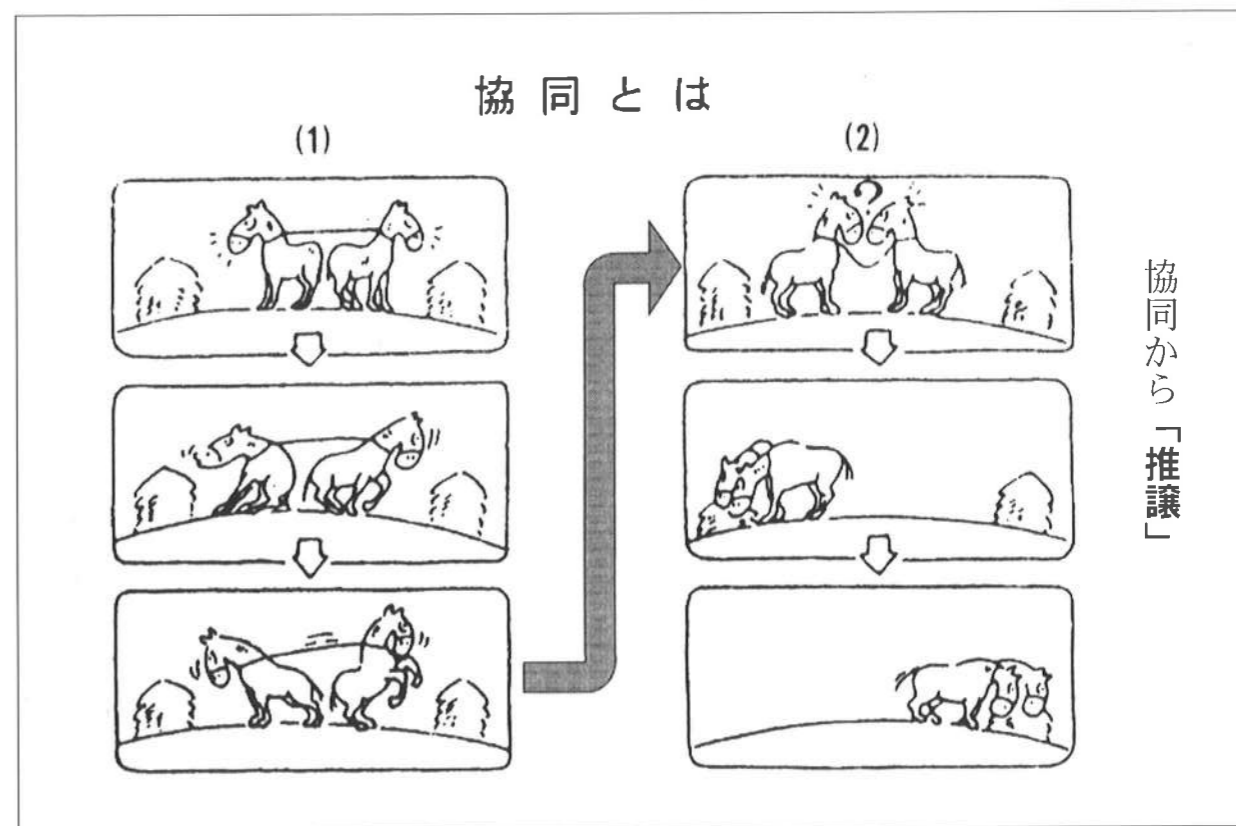
まず、総収入（円全体）の半分を「分内」とし、あとの半分を「分外」とします。更に、分内を経常費と臨時費に、分外を自譲と他譲にわけます。四つに分ける割合は、人それぞれの生活状態、地位、職業、財力等によっても異なり、決して一律ではなく人によって分度を決めることを説いている。

## Q5. 「推譲」ってなあに？

**A** 推譲とは、文字どおり「押し譲ること」である。自分の将来に向けて、生活の中で余ったお金を家族や子孫のために貯めておいたり（自譲）、他人や社会のために譲ったり（他譲）することで、人間らしい幸福な社会ができるという教えである。

尊徳は、「獣の手は、自分の方にしか搔くことができないが、人の手は物を我がほうに取り寄せたり、向こう（他者）にも押しやることができる」と述べ、人たるものは自他共存の生き方をすべきと言っている。

豊頃町教育研究所では、この「推譲」という言葉を今の言葉に言い換えるなら、共同、協同という「ゆるむ心で 共に生きる」～自然や人に対する「やさしさ」「おもいやり」の心～「ボランティア」につながる「共生」の心と解釈をした。



Q6. 「<sup>せきしょう いたい</sup>積小為大」とは？

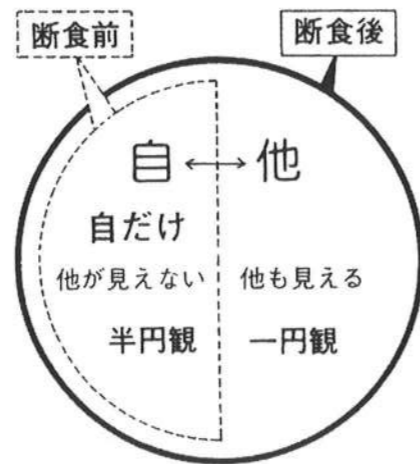
**A** 小さな努力をこつこつと積み重ねていけばいずれは大きな収穫や力に結びつくという教え。

大きなことを成し遂げるには、まず、小さなことを怠らず、行うことが大切である。とかく人間は、小さいことをきらい、大きなことばかりに目がいくけれども、大きなことは本来小さなことの積み重ねであり、小さいことをおろそかにするものは大きなことなどなせるわけがない。小さなことをおこたらず積む努力をしなければならぬという尊徳の教え。「ちりも積もれば山となる」である。

Q7. 「<sup>いちえん ゆうごう</sup>一円融合」とは？

**A** 尊徳のものの見方、考え方は、この世の中で相対するものはすべてが互いに働き合い一体となっている。だから決して切り離して考えるのではなく、両方をあわせて一つの円の中に入れてみるというもので、これを「一円観」という。

そして、生命あるものはいつかは死に、また、生まれてくるといったサイクルが永遠にくりかえされている。たとえば、植物は種をまけば、やがて草となり花を開き、実を結ぶ。その花もやがて



はかれ、土に帰る。

そして、その種が残りやがてまた芽を出す。このように世の中のものは、そのままの姿でとどまらず、次の形や新しい形になってあらわれてくる。そのためには、いくつかのものと結びつき、あるいはとけあっている。たとえば、種が草になるには、水や修分や温度、日光、種の生命力などがとけて一つになっていく。これを一円融合という。



Q8. える夢館前の金治郎像に、「<sup>いとく ほうとく</sup>以德報徳」という言葉があるが、どんな意味か？

**A** 尊徳は青年時代の体験から荒地にもふしぎな力がひそむのを知った。菜種にも捨てる苗にも、すばらしい力が隠れていた。藁をなつて縄をつくり、わらじを作り、竹を裂いて竹かごを器



用につくりながら、物にはなんといろいろなはたらきがあるものかと思った。

尊徳は桜町に赴任する前に、こんな道歌をつくっている。

はき捨つる ちりだに積みば  
おのずから 竹の子らまで みなふとるらん

「荒地は荒地の力によって起こし返し、借金は借金の費えによって返済する」というやりかたを発明していた。また、成田山にこもり断食修行をしたあと、どんな人にも良さがあ、役に立つところがあると考えるそれを育てる気持ちになった。それでもまだ、そういう力、そういうはたらき、そういう長所を統一して、なんと名づけるべきか尊徳はわからなかった。ところが、尊徳が天保2年、桜町仕法の経過を藩主に報告した時、

藩主の大久保忠真は、「そちのやりかたは、論語にある『徳をもって徳に報いる』というやりかただな」と言われ、ここで彼は長い間求めていた自分の考えの表わし方を得たと思った。

荒地の力、捨てる苗の力、藁のはたらき、それから十人十色の長所・美点、そういうもの総称して「徳」と呼ぶことにしよう。そうして、すべてのものに潜んでいる徳を人間の力



で引き出し、役に立てることを「報いる」と呼ぶことにした。釈迦が生まれたとき、『天上天下唯我独尊』と言ったと伝えられているが、これは自分のことを自慢したのではない。天地間のすべてのものは、他のものになんか独特の尊さをもっていることを説いたと考えたい。

「徳」という言葉は、昔から「高德の僧」とか「聖人の徳」等と、特別な人格的な価値だけに用いられていたが、尊徳はこの世に存在するすべてのものに、「徳」が存在すると考えた。

## 「徳」とは？

二宮尊徳は、物や人のもっている「良さ、取りえ、持ち味」のことを『徳』として、その徳をうまく使って社会に役だてていくことを『報徳』とよびました。尊徳は、「あらゆるものに 徳がある」と考えました。これを『万象具徳』といいます。この万象具徳の内容について、小田原の報徳博物館 元館長の佐々井典比古さんは次のような詩で表現しています。

このよはたのしい ふえせかい	とりえとりえが むすばれて	じぶんのとりえを ささげよう	ひとのとりえを そだてよう	ものとりえを ひきだそう	どこかとりえが あるものだ	よさがいっぱい かくれてる	よさがそれぞれ みながう	どんなひとにも よさがある	どんなものにも よさがある	万 象 具 徳
-------------------	------------------	-------------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	------------------

\* 「ふえせかい」は増え世界（限りあるものから限りないものが生み出される）のことです。

## 四. 二宮尊親の北海道（豊頃）開拓

### Q 1 尊親（尊徳の孫）の北海道移住の理由は？

**A** 二宮尊親は祖父の二宮尊徳が、日光（栃木県）で仕事をしていたとき、日光の今市で安政2年に生まれたが、明治元年には父尊行と共に相馬（福島県）に移り住んだ。父尊行はまた報徳の教えに従い荒れた土地を開墾させるため住民にお金を貸し相馬の開拓を進めていつたが、明治維新（明治2年版籍奉還、明治4年廃藩置県）で政治のやり方が一変したことから、事業が行き詰まってしまった。一番困ったのは貸し金が回収できなくなってしまったことである。

明治10年、富田高慶らと共に二宮尊親はご仕法中止に変わる、「興復社」を創設し衰えた地域の復興にとりかかった。しかし、長くは続かなかった。それは、国の政策が変わってしまったことと、本州で荒地を開墾し豊かな農村をつくろうとしても、なかなか適地が見つかりません。そこで、高慶の死後、尊親はその行き詰まりを打開するため、広い土地を開拓したいと希望する人たちを北海道に移住させ、未開地を開墾し、新しい村を作り、日本農業の発展に寄与しようと考えたのです。

### Q 2 尊親はどのように土地を見つけたか？

**A** 十勝岳に源を発した本道第三の大河十勝川は、十勝中の水を集めて海に注いでいるが、十勝の歴史はこの川を抜きにしては語ることはできない。文久3年（1863）、青森県の堺千代吉が豊頃町に住む場所を構え、これが十勝で和人が住み着いた始めである。（十勝発祥の地）当時は一面が未開の地で、狩や漁を営むアイヌの人達の家が点在していた。やがて、明治2年に開拓使庁が設けられ、その直轄となり、明治13年には役



場が大津に置かれた。この頃近くの原野に入植が始まり、明治29年から植民地区画が行われるようになったため、内地府県からの移住民も次第に増え、大津に上陸後、陸路や十勝川をさかのぼって、十勝内部に入植していった。

二宮尊親も、明治29年に土地を求めて北海道各地を探検した。十勝に入ってもなかなか理想とするよい土地が見つからず、<sup>ふしん</sup>腐心の帰途の大津の宿で、「ウシシュベツという良い所がある」と聞き、現地に詳しいアイヌ人のトカンの案内を頼んだ。

十勝川を進み、ウシシュベツ川をモイワからさかのぼり小高い丘（二宮報徳神社）より四方を見渡し、「これぞ探し求めた理想の郷」と、当地を興復社開拓の地と決定した。

### 尊親の理想の土地三条件

- ① 大原野の中央でなく、丘か山に隣接していること
- ② 土地が肥沃で水害の少ないところ
- ③ 運輸交通の便利なところ

## Q3 尊親の二宮開拓はどのように？

**A** 興復社社長になった<sup>にのみやたちか</sup>二宮尊親（そんしん先生と呼ぶ人が多い）は、明治29年（1896）移民の入植地に、十勝川下流部、<sup>とよこ</sup>豊頃村のウシシュベツ川沿岸を選びました。そこに農耕地として403万0,436坪の貸付を受け、のちに牧場用地395万1,727坪を買いましたから、約2,660ヘクタールの大農牧場がそこに出現するのです。これが現在の豊頃町二宮地区（一部<sup>の</sup>農野牛地区にまたがる）になります。移住した人たちは、福島県の旧相馬藩に住む人達为中心となり、明治30年（1897）19戸75人が初めてウシシュベツ原野に到着しました。その後も入植は続き39年160戸901人になりました。移民の農事指導と生活の世話をするため、吉田義重、渡部盛ほか事務員も来て、現在の二宮地区農業構造改善センターのあたりに事務所を建てます。

二宮社長は<sup>もいわ</sup>茂岩市街の住宅から、毎日10Kmほどある農場まで歩いて通い、移民の指

導に当たりました。道庁は、ここを植民地に決め、手続きがはかどるよう1戸分5町歩の区画地図をつくっていました。これでは農耕の適、不適がかたよりすぎるため、事務所が別に測量をし1戸毎に川に面した肥沃な土地と、薪炭林につづく丘陵沿いを組み合わせ、できるだけ平均的な土地配分になるよう努めました。1戸5町歩にかわりませんが、内5反歩は薪炭林地に、5反歩が戸毎の宅地、通路、水溝等、あと4町歩を耕地にする計画です。移民が入植する前、数戸の農家がすでに開墾を始めていたから、その一部の人たちもこの計画に加わりました。



### 二宮農場 移住資格

- ① 身体強健にして、三年以上農業に従事した者
- ② 二十歳以上の男子で家族を有し、二名以上の労働力がある者
- ③ 本人家族に犯罪前科のない者
- ④ 一人で十五円以上の携帯金のある者(四歳以上)
- ⑤ 渡航旅費、荷物運搬費とも自弁できる者

## Q3 <sup>こうふくしゃ</sup>興復社の開墾と経営は どう行われたか？

**A** これが興復社牛首別農場です。30年から34年に入植した家は6年間で、35年入植は5年、36年入植は4年で4町歩の原野を開墾し耕地にする約束ですから、明治39年（1906）末に農場はひと区切り、この間に農耕地640町歩を開墾し各自宅を建て、道路22カ所6,951間、橋梁<sup>きょうりょう</sup>61

カ所175間、排水路164カ所2万6,662間を造りました。その他、当初計画にない牧場の開設に取り組み、2万5,000間の木柵を築き、各家の馬を放牧し、牡馬229頭、牝馬100頭を数えました。そして、栗、落葉松、黒赤松等を植樹し、林地の保全にも意をそそいだのです。

39年は、作付け面積の約半分が白大豆の畑で(305町歩)、黒大豆183町歩、小豆16町歩等、豆作りが主流でした。穀類では黍106町歩、玉蜀黍12町歩が目立ちますが、粟、稗は僅か、大麦燕麦各1町歩ですが、蕎麦は16町歩、小麦はごくわずかです。馬鈴薯が20町歩あり、十勝の他の農場と差はありませんが、各家で2、3頭の馬を飼い、プラウ、ハロー、除草器等西洋農具と組み合わせて作業したことに特色があります。

## Q5 興復社(牛首別農場)の農作物の変遷?

**A** 報徳思想の相互弁用手法にのっとり、移民の生産物を事務所が一括集出荷する共同売買方式は、移住民規約でうたわれながら、明治42年(1909)に行なわれただけで、あとは各組(後述)単位で実施されたにすぎません。それでも事務所による生産財、生活消費財の供給は行なわれ、協同組合の先駆的役割を果たしました。第一次世界大戦の前後、牛首別農場に転機が生じます。1つは畑作から稲作主体への転換です。大正12年(1923)水利組合ができ、丸山からながめる黄金色は「壮観かつ豊かさ」を感じさせましたが(二宮開拓百年記念誌)国の減反政策で昭和59年(1984)、二宮の水田は皆無になりました。また、亜麻やビート等、畑作に新たな作物が加わり、更に乳牛の導入による酪農がめばえたことも忘れてはなりません。畑作、稲作、畜産を組み合わせた農業経営により、たび重なる冷害、水害そして不況と戦争統制を乗り切ったのです。

## Q6 興復社の人々のくらしはどのように?

### A1 「勤労」に徹する

だれでも希望すれば移民に加えてもらえたわけではありません。3年以上農業経験ある家族もちで、15歳以上の働き手が2人はいて、1人分15円の携帯金を準備した後、渡航旅費は自費です。にもかかわらず牛首別農場を目ざしたのは、自主自立の精神にもとづき一人前の農業技術者としての主体性が認められ、将来自作農として独立できる見通しがあったからでしょう。

この夢を現実にする根元は、「勤労」を重んずることだと信じていましたが、毎日の労働は辛苦の連続でした。日の出とともに出入り口にさげた柵(拍子木)を打ち、起床をつけて畑に出、日が入ると家に帰り索綯(縄をなう)するのが日課、縄ないのわずかな収入を報徳金として積み立てます。報徳訓は子孫の豊饒が自分の勤労にかかっており、衣食住の全てが田畑の勤労から生まれると説いているのです。個人の権利を尊重するとはいっても、家族国家観を乗り越えられたわけではありません。

### A2 「分度」を守る

明治になっても封建遺制が強く、男女差別観が残っていましたが、報徳思想は男女平等の家庭をめざし、夫婦は助け合い和合して子孫の繁栄を願いました。

移住前に結ぶ契約の中に「家計節儉ヲ守リ、有余ヲ生シテ之レヲ儲蓄シ、吉凶臨時ノ費ハ勿論、天変凶荒ノ予備ニ充テ、又平素品行ヲ慎ミ、徳義ヲ重ンジ、一家親睦交懇切」にすることの一項目があります。各家庭では家計簿をつけ、飲酒を慎み賭勝負ごとを禁じ、虚礼を廃し無駄な出費をしないよう、細かな気配りをしました。

ケチな生活を強いたのではありません。分限を越えたハデな浪費をやめて収支に計画性をもたせ、家庭行事、結婚、葬式や非常災害に備えて蓄え地域へすすんで寄付(公課)するためでした。こうしたくらしの設計を「分度」と呼び、報徳思想の特徴の一つでもあります。

### A3 「推譲」に生きる

移民は住居が決まると近隣の10戸ほどで組をつくり、ほぼ入植年順に15組ができ、1番組から15番組と呼ばれ、組単位で日常生活から冠婚葬祭、道路橋排水路工事、冷害水害救援活動まで、お互いが助け合い弁用し合って生活することになりますから、組内の意志疎通が大切な条件でした。しかし、隣近所のいざこざ、組内の意見の相異は少なくありません。そこで、組に1人ずつ選ばれた<sup>かんこんそうさい</sup>什長の役割が重かったのです。

組の活動は家庭の寄付行為（労働、金銭、物資）によって成り立ちます。これを報徳思想で「推譲」といい、自家のための備蓄（自譲）と分けて、他譲と呼ぶこともあります。今日の国や町に納める税金もその一種にほかなりません。人が集まり社会をつくり、その生活を安定向上させるために、なくてはならない精神であり行為であると考え、人間らしく生きるにも、争いのない社会を築くにも、推譲は欠かすことのできない生活原理でした。

### Q7 牛首別報徳会とは、どのような活動をしたか？

A

組ごとの活動は興復社事務所によって統括されますが、これと表裏の関係をなす移住者による自主的な住民組織が明治35年（1902）にできました。

それが、法人組織にかかわって現在まで続く牛首別報徳会です。目的は報徳思想を農場内外にひろめ、自らそれを遵守し永安を計り、報徳金（土台金、善種金、加入金、元恕金）を推譲して、災害病難の救助、道路橋排水路修復、勸業奨励、力業篤行表彰等を行うのです。たとえば火災にあった家には、組内の家から1戸<sup>いなきび</sup>稲黍半俵、組外は20銭を、疾病で農作業のできない家には農繁期に労働奉仕を、大水害にあつては救援金品の推譲を続けました（牛首別報徳会60年史）。

無利息金貸付というユニークな融資制度もありました。それにもかかわらず、42戸の後継移住者が記録されていますから、その数だけ農場を去った人がいたことになりま

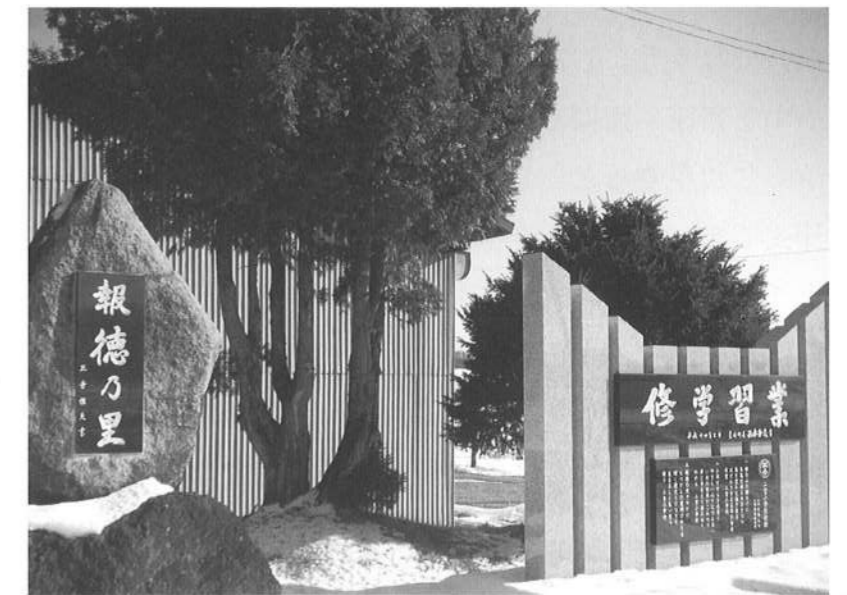
す。農場事務所による経営は、昭和6年（1931）に完了しましたが、その後も報徳会は教育、保育、敬老、女性活動等への推譲を続けています（報徳百年）。

農場の成功は移住者が主体的につくり運営した報徳会の積極的な活動なくして、語ることはできません。

### Q8 心田の開発と地域の創造はどのようになされたか？

#### A1 「いもこじ常会」による

豊頃町内の茂岩、豊頃両小学校庭に、二宮尊徳が子どもの頃、柴を背負い本を読む像が建ち、教育の大切さを語っています。農場では開設後、さっそく子どもの初等教育を始めるべく準備をすすめ、31年事務所員自宅に寺小屋式の教室を開き、それを33年事務所に移し、34年専任教員を招いて公立の牛首別簡易教育所の設置にこぎつけました。この学校が平成14年



旧、二宮小学校の庭にある記念碑

100周年を迎えて閉校するまで続きました（修学習業）。

父母が子どもの教育に熱心だったばかりか、父母も毎月20日の午後、学習会に参加し、二宮尊親の話を聞き、営農知識を語り合う等、今日の生涯学習活動を続けたのです。これをいもこじ常会と呼んだりしましたが、参加者がお互い意見を交流し、知識をひろめ、考えを深め合うことから呼ばれた名です。報徳思想は田畑の開墾と同じく心の開墾の必要性をかけたが、牛首別の「いもこじ」はこれをみごとに稔らせました。

## A2 「心を寄せ合う場」として

辛い時も嬉しい時も、心の拠り所は神であり仏です。各家や組が集まり故郷の氏神や馬頭観世音、地神、蒼殿神、稲荷神社を祀り供養しました。それでも農場の成功を願う移民は心を一つにして祈り祀る神仏がほしかったのでしょ。二宮尊徳を祭神にする報徳二宮神社が栃木県今市町に鎮座すると、その社殿上棟式であった明治30年11月14日、牛首別の丸山に遥拝所



二宮神社の鳥居

の標木を建立、大正6年に社殿を建築し、同9年今市より分霊を迎えここにも報徳二宮神社が誕生しました。さらに大正11年尊親が死去すると、分骨を乞うて霊場を事務所敷地内に築立神社とともに農場象徴の地になるのです(報徳百年)。



高い丘にある二宮神社社殿

4月8日移民記念日、7月29日探検記念日、11月14日(現在は9月第3日曜日)を二宮神社祭にきめ、この日は国の祝祭日と同じく農作業を休み、家族ともども物の豊饒と家内安全を祈り祭りを楽しみ移民の協同発展を誓ったのです。

## Q9 自治による村づくりは、どのように進められたか？

### A1 <sup>じゅうちょう</sup> 什長会議と自治機能

報徳思想は個人を尊び自治社会の構築をめざしましたが、牛首別はこれをどのようにすすめたのでしょうか。

農場経営の権限は興復社にあります。重要案件は社からの諮問による什長会議の決議を経て実行に移されました。そのことは、「什長ノ命免ハ本社長之レヲ行フ」(移住民規則)と決まっていたが、毎年末いもこじ常会で記名投票により選ばれた力農篤行者



什長の看板と農場名札

の内、組内の信頼の厚い人を当てたので、什長会議の自治機能は高かったと言えます。

こうした実績を基に村づくりに積極的に参加します。報徳会の法人化に際し「地方自治ノ改善発達ノ援助」をうたっていることから、それがわかります。明治39年豊頃村は初めて自治体として認められ村会を開設しましたが、8議員中、農場から武野侃(1番)、井村宗吾(6番)、原良助(1番)、日下伊三郎(8番組)の4人が当選しました。自治活動に積極的に参画することが、以徳報徳、富国安民という大きな目標につながると確信していたのでしょ。

### A2 報徳思想のひろまり

牛首別農場の指導者二宮尊親は、明治38年2月22日東京の学士会事務所で講演をしました。そこに内務省の局長や書記官、農商務省の局長、法制局参事、文部省の秘書官をはじめ道庁岡崎文吉、家庭学校長留岡幸助、東京出獄人保護事業主管原胤昭等が出席しました。彼らは尊親から何を学ぼうとしたのでしょ。